

「飯舘村の母ちゃんたち」通信 No17

2022年9月発行

劇場上映・映画祭参加へのご支援をお願いします！

岡戸 良子（映画「飯舘村の母ちゃん」制作支援の会代表）

2011年の東日本大震災から11年、映画「飯舘村の母ちゃん」制作支援の会及び映画制作に長い間ご支援くださり心からお礼申し上げます。お待たせしております第二作目は順調に編集が進み、タイトルは「飯舘村 ベこやの母ちゃん——それぞれの選択」に決定しましたことをご報告いたします。

2020年からのコロナ禍において、映画制作は大変に困難な時期となりました。しかしながら、制作支援の会としては、映画に今まで関わってこられた飯舘村の方々に寄り添い、困難な時期を共に歩む事はとても大切なことと認識しておりました。

飯舘村の避難指示が2017年3月に解除されましたが、帰村する方々の多くは高齢者であり、若い村民のほとんどは他県に移り住み新たな営みをすでに始めています。飯舘村の村民の高齢化が深刻となっている矢先、コロナによる高齢者の村民のソーシャルディスタンスは、彼らの孤立化に一層拍車をかけました。このような厳しい環境の中で、第二作目に登場されるベこやの母ちゃん達が、それぞれに置かれた環境の中で精一杯努力して自分の生き方を前向きに切り開く姿は、とても頼もしく思えます。お母ちゃん達の間接的な映像と母ちゃん自身の言葉で存分に表現されています。

現在の世界の社会情勢を見ると、ロシアのウクライナへの軍事侵攻からチェルノブイリ原

発を占領し軍事基地として利用し始めているこのおぞましい現実。アフガニスタン、ミャンマー、シリア、パレスチナ、アフリカ大陸、南米、どの国を見ても人間の尊厳がはく奪され、戦火から逃れる人たち、故郷を追われる人たちで世界は溢れています。2021年のUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の統計では8930万人の人たちが難民として移動を余儀なくさせられています。福島で被災された方たちも同じ状況であると言えるのではないのでしょうか。

私たちは核兵器による唯一の被爆国であり、福島原発事故を経験した者として今できることは、次世代にこの事実を正確に残し、一人ひとりがこの大切な「地球環境といのち」を守るために自分の事としてこの問題をとらえることであると思います。そのために、震災からの10年を記録した映画『飯舘村 ベこやの母ちゃん——それぞれの選択』の制作・上映は、私たちの未来と平和な社会の実現の為にもとても重要な役割を担っていると思います。

これからも決して福島を忘れないために、『飯舘村の母ちゃんたち—土とともに』同様に劇場上映の実現と国内外での自主映画会の開催、国内外の映画祭参加を目指し、制作支援の会は活動を続けていく所存です。引き続きの皆さまのご協力とご支援を改めてここにお願い申し上げます。



3人のべこやの母ちゃん

古居 みずえ（映画監督・ジャーナリスト）

「飯館村の母ちゃんたち」の第2作がようやく完成間近となりました。第2作「飯館村べこやの母ちゃん——それぞれの選択」は、2011年の原発事故前までは牛と共に生活をしてきた母ちゃんたちのその後の人生の物語です。べこやを続けられたのはただ1人。ほかの2人はほかの道を選ばざるを得ませんでした。今回は「べこや」としての母ちゃんたちの素顔の一端を古居監督が紹介します。

無類の動物好き 原田公子さん

原田公子さんは根っからの動物好きだ。それは牛に限らない。

飯館村の家に行ったときはまず犬がわーん、わーんと吠えてお出迎えをしてくれた。そして猫が寝そべっていた。たくさんの牛たち。大人の牛もいれば、生まれたばかりの牛もある。家の裏に回れば鶏がいる。尾っぽの長い鶏がこっここと鳴いている。

避難先の村でも、連れて来た犬や猫、そしてポニーがいた。公子さんほどの動物に対しても同じように優しい。優しく語り掛ける。



最近生まれた牛が未熟児だった。公子さんは弱いものにやさしい人だ。未熟児の牛は一度に飲めないで、何度も分けて飲ませる。5時間ぐらいおきに飲ませるから、夜中も牛舎ま



で来て牛にミルクをやる。毎晩深夜に自宅から牛舎まで来るのはつらい。日々の肉体労働に睡眠不足が重なった。苦勞の甲斐があって、



最初は弱かった牛も次第に他の牛に負けないぐらいの大きさになった。公子さんは最も弱い牛に合わせて他の牛も育て上げる。ミルクを飲むことがどうしても遅い牛がいた。大ちゃんという名前の牛はいつも他の牛よりもミルクを飲むのに時間がかかる。公子さんは大ちゃんがミルクを飲み終えるまで辛抱強く待つ。あまりにも動物をかわいがるものだから、公子さんは周りの人たちから「旦那より、動物が大事だべ」と言われることがある。公子さんは反論する。「大黒柱の旦那がいるからこそ、動物を可愛がることができるんだ」。



牛一筋に 中島信子さん

中島信子さんは中学の頃から牛飼いの仕事を始めた。とにかく牛一筋の人だ。



私が初めて信子さんにあった日は牛が屠畜に出される初日だった。

「誰のせいなのよ。なんのせいなの。こんなんしてね。悔しくてたまんない」と訴えるように話してきたのが信子さんだった。



福島第一原発事故により、ミルクから高い放射線量が出たことで、酪農家たちはミルクを出荷することも、外で牧草を食べさせることもできないでいた。酪農家たちは会議を開き、悔しい思いで休業を選んだ。そして弱っている牛から屠畜することに決めた。信子さんは行き場のない怒りをどこにぶつけたらいいのかわからない様子だった。私はその日から





信子さんたち酪農家のお母さんたちのことをずっと追いかけていたと思った。信子さんには静子さんという娘さんがいる。休みになると信子さんのところにやってきて一日を過ごす。静子さんは信子さんのことをよく語る。

「うちのお母さん、身体を張ってやっていたもの、何十年も。(牛を) どれほど大事にしていたかわかる。私は小さい時から見てきたから。殺処分された最初の牛は、蹴飛ばされて

も何しても可愛がっていた。ある日、お母さんは牛に蹴飛ばされ、膝がぼっかり割れるほどの大怪我をした。それでも乳搾りを最後までやり切って、1人で病院に行った」。

60代、70代になったべこやの母ちゃんたちは腰が曲がったり、膝を曲げることが出来なかったりする人が多い。60代の信子さんはだんだん腰が曲がって来た。普通ならまだ腰が曲がるような年代ではない。静子さんによると、草は乾燥させてからロールにラッピングするのだが、ある日信子さんが家の広い農地にいるとき、その大きなロールが上のほうから転がって来たという。信子さんが止めて押さえようとしたら、その重みで腰をやられた。以来、腰が曲がった。そして膝は牛に蹴られて負傷し、曲げることが出来なくなった。映画の主人公のひとり、長谷川花子さんも膝を曲げることはできない。長く牛の乳を搾るときは椅子の世話になる。前作の主人公菅野榮子さんは牛に足を踏まれて負傷し、数十年たってからその痛みが出てきて足を引きずるようにして歩いている。べこやの母ちゃんたちはまさに体を張って仕事に生きてきたのだ。



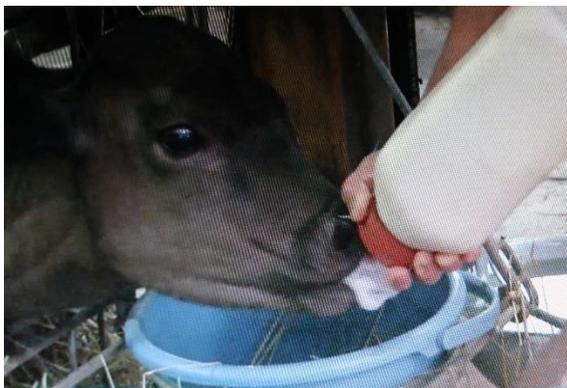


結婚後べこやに 長谷川花子さん

長谷川花子さんはおしゃれするときにはお姉さんの美容院に行く。福島には美容院と理髪店が一緒になっているお店が多いが、お姉さんの美容院もご主人の理髪店と隣合わせに並んでいる。長谷川花子さんは高校を卒業して理髪師を目指した。花子さんのお姉さんが一足早く美容師になっていたし、手に職をつければ何かあっても1人でやっていけるというご両親の娘への思いがあった。

花子さんは当時、福島県には一校しかなかった理美容学校に受かった。親戚の家に寝泊まりし、バイトをしながら学校に通い、1年後隣町で、住み込みの理髪師見習いをした。卒業してこれから独り立ちというときに、同級生の長谷川健一さんと再会し、結婚を決意した。しかし飯館村ではお店も少なく、理髪師としてやっていくには難しかった。

家族からはせつかく理髪師としての道を行けるのにと大反対された。のちに家族も健一さんのことを大変気に入って、幸せな生活が始まった。花子さんは結婚当初、健一さんから「おめえに預けっからミルク飲ませてくれ」



と言われて、3頭の子牛をプレゼントされた。花子さんはそれまで牛を育てたこともないし、当時は子牛のミルクをやるのに今のように便利な乳首のついた哺乳用バケツなどなかった。



最初は戸惑いながら、どうしたら飲ませることが出来るか考えた。そして花子さんは子牛たちにミルクを飲ませるのに自分の指を吸わせて飲ませれば良いと気づいた。子牛たちは喜んで花子さんの指にむしゃぶりついてミルクを飲んだ。ミルクをやることには成功したが、彼女の指は子牛たちにしゃぶられすぎてざらざらに荒れてしまった。でもその時から花子さんは自分の指に絡みつく子牛が可愛くてたまらなくなった。その子牛たちが大きくなって乳を搾れる牛になったという。こうして花子さんは牛飼いのお母さんになったのだ。



宣伝・上映のために さらなるご支援を！！

毎日ニュースを見れば、世界ではウクライナ、そして日本ではコロナ感染、統一教会などのニュースで溢れています。しかしながら今から 11 年前に起こった原発事故は、大きな被害を出しながら、ニュースとして出るのはごくわずかです。原発事故の責任の所在は問われず、およそ 3 万人もの人々が未だに避難生活を余儀なくされています。

このまま、あったことをなしにしてはいけない、原発事故が人々の間にどのようなことを残したのか、記録に残していきたいと 11 年間かけて福島県飯舘村のお母さんを中心にお話を聞き、撮影を続けてきました。

2020 年からのコロナ禍で映画撮影は難航し、2 年間遅れをとりましたが、やっと仕上げの段階まで進んでいます。これも皆様のおかげです。

しかし、映画は作るだけで終わりではありません。この後は少しでも多くの方々に映画を見ていただくために宣伝・配給活動をしていかねばなりません。

そのためにはまだまだ資金が不足しております。この映画を世に出すために、福島のことを考え続けるために、さらなるご支援をお願いいたします。

(監督・古居みずえ)

福島弁を大切に

クレアリー寛子（日英翻訳家）

私は前作『飯館村の母ちゃんたち—土とともに』の自主上映会を主催したクレアリー寛子です。米国ミシガン州とハワイ州、日本では福島と三重で計8回の上映を行い、福島の声をお届けすることができました。

この度、第2作目『飯館村 ベこやの母ちゃん—それぞれの選択』の英語版字幕を担当いたします。今度は翻訳者として、そして福島県民として、標準語にならない福島の言葉を大切に翻訳したいです。

例えば「ベこや」ですが「牛飼い」に言い換えると「何か違うな…」と感じました。登場する3人の女性は「ベこや」であること/あ

ったことの誇りを語ります。その目線から、福島が困難が語られることにこそ意味があると思います。

彼女たちは「ベこや」である者、あるいは「ベこや」であった者。それが彼女たちの過去と現在の連続性であり、その延長線上にある未来を見つめる立ち位置です。英語版字幕を担当するにあたり、その立ち位置に私もしっかりと腰を据え作業にあたりたいです。

本作を世界中にいる「ベこや」に観てもらえたら—そんな気持ちで、「いいやんべえ」な英語版字幕になるよう、がんばります。よろしくお願ひします。

お知らせ

カード決済ができるようになりました！

今まで支援金は、わざわざ郵便局まで行って郵便振替用紙で振込んでいただいていたのですが、カード決済もできるようになりました。まず、インターネットで、映画「飯館村の母ちゃん」制作支援の会を検索するか、右のQRコードをクリックしてください。

そのホームページ内の「支援のお願ひ」あるいは「お知らせ」のページで案内をお読みの上、お手続きください。3000円以上任意の金額の支援金が送金できます。



支援金は
個人1口 3,000円
団体1口 10,000円
多数口大歓迎です！！

振入の場合は、
ゆうちょ銀行〇一九（ゼロイチキユウ）支店
当座 0664342
口座名 映画「飯館村の母ちゃん」制作支援の会

初めての方はメールでご住所をお知らせください。どうぞよろしくお願ひします！

通信発行：映画「飯館村の母ちゃん」制作支援の会

〒169-0072 東京都新宿区大久保3-10-1-834 Fax 03-3209-8336

メール iitateka311@bb-unext01.jp TEL 090-7408-5126